

石塔造立からみた惣墓の形成過程

村木二郎

①……………はじめに

奈良県天理市中山念仏寺墓地は、奈良盆地の東端に位置する惣墓である。複数の村落で共同利用される墓地を惣墓と呼ぶが、これは奈良盆地では一般的な形態の墓地である。墓地には北西の角に塔高約2mの鎌倉時代末期から南北朝期と思われる五輪塔が立っている。また現在は念仏寺本堂脇に移されているが、墓域の一角である燈籠山古墳前方部にあったと伝えられる地藏坐像石仏には貞和5年(1345)の銘文が記されている。これらの遺物から、中山念仏寺墓地の初源は14世紀半ばまで遡りうる。

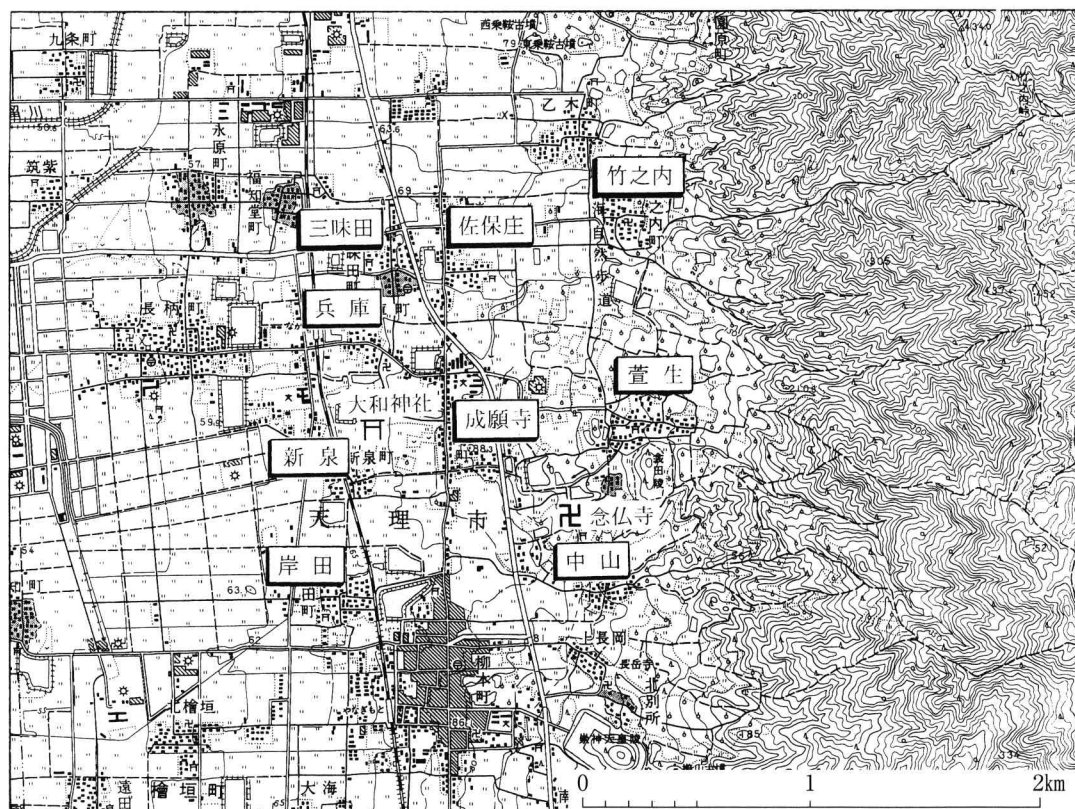


図1 中山念仏寺墓地と墓郷

しかし、それ以降継続的に石塔が立てられ現在の墓地景観を呈するに至ったわけではない。これは他の惣墓でも往々にしてみられることだが、中世前期まで遡る資料はわずかで、16世紀半ば頃から漸く継続的な石塔造立状況がみられるようになる。中山念仏寺墓地では天文3年(1534)の銘をもつ背光五輪塔の出現がそれにあたり、この形式は18世紀半ばまで使われ続ける。もちろんこの空白期間に全く石塔が立てられなかったわけではなく、墓地に点在する無銘の小型五輪塔部材や箱仏がその候補となる。小型五輪塔地輪に1点、永享7年(1435)の銘が記されており、それを裏付けよう。ただ、これらの形式は庶民層が墓地を形成していることが確実な近世にまでは至らず、中世の段階で途絶えてしまう。

惣墓を形成する村を墓郷というが、中山念仏寺墓地の墓郷は現在、中山、成願寺、萱生、新泉、三昧田、兵庫、佐保庄、竹之内、岸田の9ヶ大字で形成されている。しかし、天保14年から弘化3年(1843~46)の間に作られた『大和国三昧明細帳』によれば[伊藤1979]、長柄村も含まれており、もとは10ヶ村からなる惣墓であったことがわかる。中山念仏寺墓地はこの墓郷を構成する村落の中では南東に偏っており、中山、成願寺、萱生の3村の境界付近、中山村内に位置する[図1]。

②……………石塔の分布域の展開

中山念仏寺墓地には現在9000基余りの石塔が林立している。これらの中には無縁化して廃棄されたものもある。しかしこの墓地は中世以来脈々と使われ続けてきたこともあり、天文、天正といった古い年号を記した石塔でも無縁化せずに祀られ続けているものも多い。小型の五輪塔や箱仏は土中に埋め立てず据えるだけの安置式であり、またそれぞれの部材が比較的小さいため移動しやすいが、背光五輪塔(不定形五輪塔、背光連立五輪塔を含む。以下も同じ)は埋立式のものも多く、意外と原位置付近に留まっている可能性がある。

ここで、元禄以前の年号を記した石塔の分布をみる⁽¹⁾[図2]。天文3年から元禄17年(1534~1704)にかけて1,254基、内訳は背光五輪塔914基、舟形311基、不定形18基、櫛形4基、有像舟形2基、丸彫像、背光宝篋印塔、無縫塔、駒形、自然石がそれぞれ1基ずつである。まず、最も密集している場所として、燈籠山古墳前方部上(a, b1, c2, g2地区)が挙げられよう。次に、念仏寺北側のi地区に濃い分布がみられる。ほかにも、e1, h1, 2, 3, 4, g1, j地区、やや少ないがb2, c1, e2地区、もう少しまばらだがd, f地区に石塔が集中している。ほかには檀家の墓域である念仏寺境内を除きほとんどみられず、広大な墓域のどこにでも石塔が立っていたわけではないことが確認できよう。

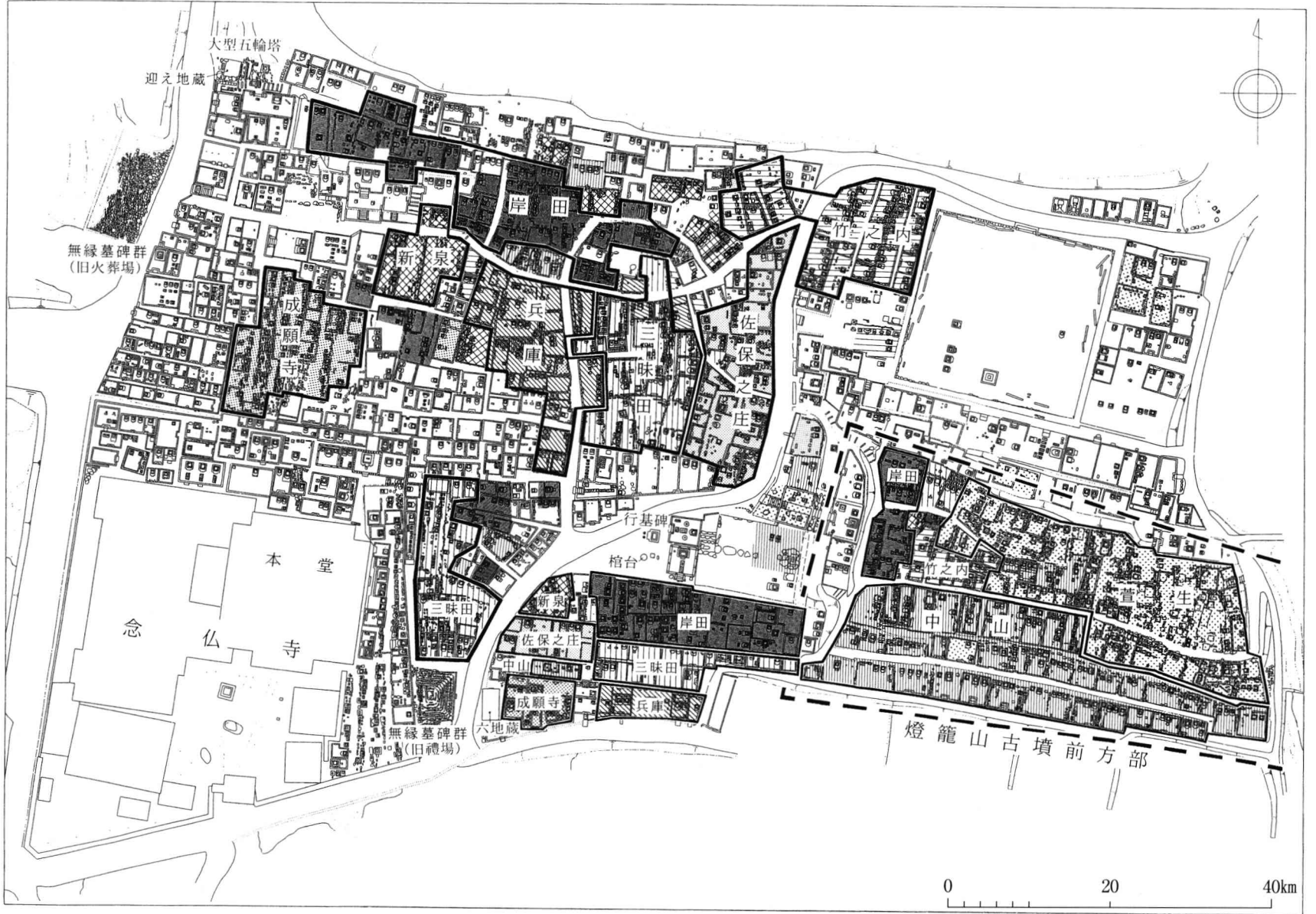
中山念仏寺墓地には「大正五年墓地実測図」という貴重な図面が存在する。これは大正5年(1916)段階の墓地の利用状況を家単位に記したもので、大字ごとに色分けして区分している[図3]。これによって、広大な墓域は大字ごとに分割利用されていたことがわかる。先にみたa地区は中山、b1, 2地区は萱生、c1, 2地区は竹之内、d地区は佐保庄、e1, 2地区は三昧田、f地区は兵庫、g1, 2, 3地区は岸田、h1, 2, 3, 4地区は新泉、i地区は成願寺の墓域に対応している。また、j地区はどこの大字にも対応していないが、お墓参りに来ておられる方から長柄の墓域と伺った。大正5年段階には長柄は墓郷から離脱しているため、墓地実測図には墓域が記載され

- 天文～文禄 (1532～1596)
- 慶長～明暦 (1596～1658)
- 万治～元禄 (1658～1704)



図2 元禄以前の紀年銘石塔分布状況

図3 中山念仏寺墓地 大字別分割利用状況 (「大正五年墓地実測図」をもとに吉澤悟氏作成)



ていないのである。これらの地区以外にほとんど石塔がみられないことから、石塔があまり移動していないこともわかる。ところで、大正5年の大字別分割利用状況では念仏寺と燈籠山古墳に挟まれた地区など、ほかにも利用されていることがわかる。しかし、そういった地区に石塔が立てられるようになるのは比較的新しく、元々の地区が手狭になったため拡張された新たな墓域と考えられる。以下、旧来の地区に焦点を当て、時期を細かく区切って石塔の展開をみて行くことにする。

ところで、元禄以前の石塔の7割以上を背光五輪塔が占めている。この形式は型式分類により編年が可能である。背光五輪塔は古いものも多く、長い間雨ざらしになったせいで銘文が読めないものが多い。また、中世段階のものもともと年号を記していないものも多い。これらを除外しては特に石塔が希薄な時期の中山念仏寺墓地の実態を見誤ることになるため、年号が不明でも型式から時期を押しえられる資料については、盛り込んでみていくことにする。そのため、特に重要なI a式については簡単に触れておきたい。それ以外は年代のみ記すので、詳細については別稿を参照されたい [村木 2004]。

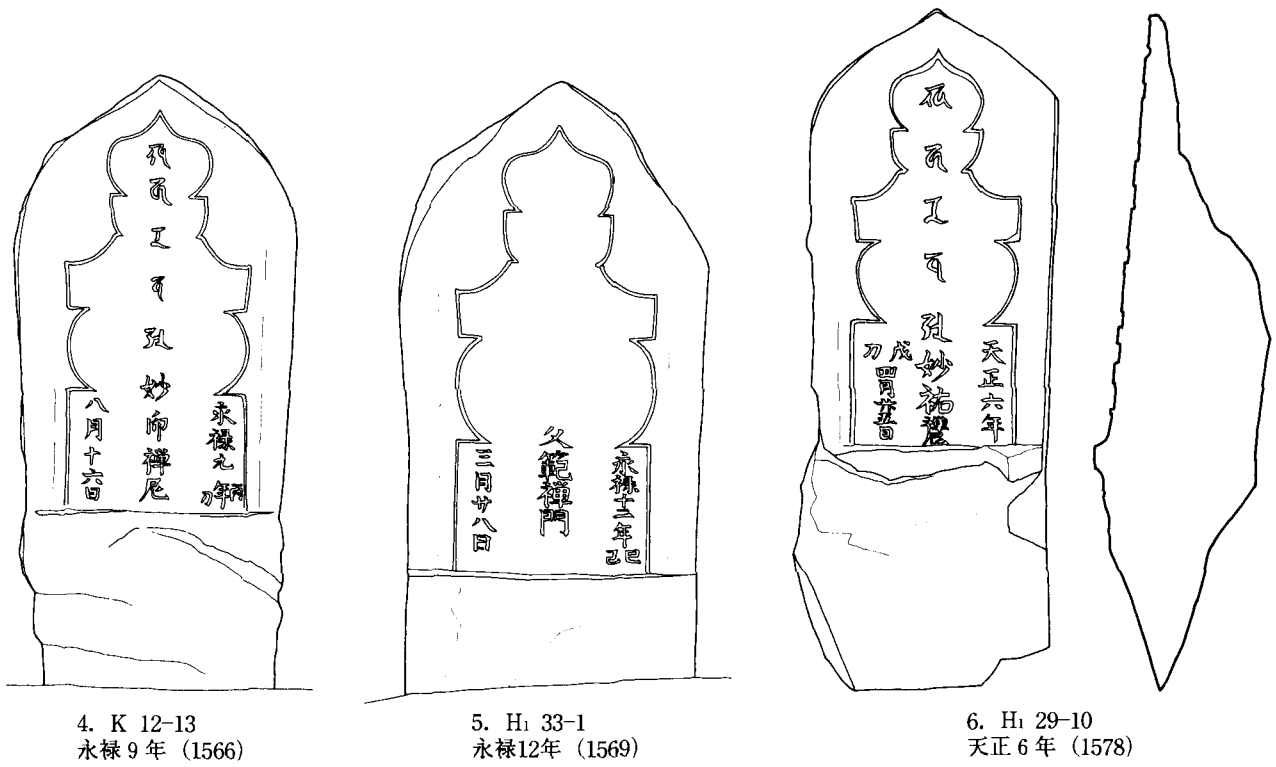
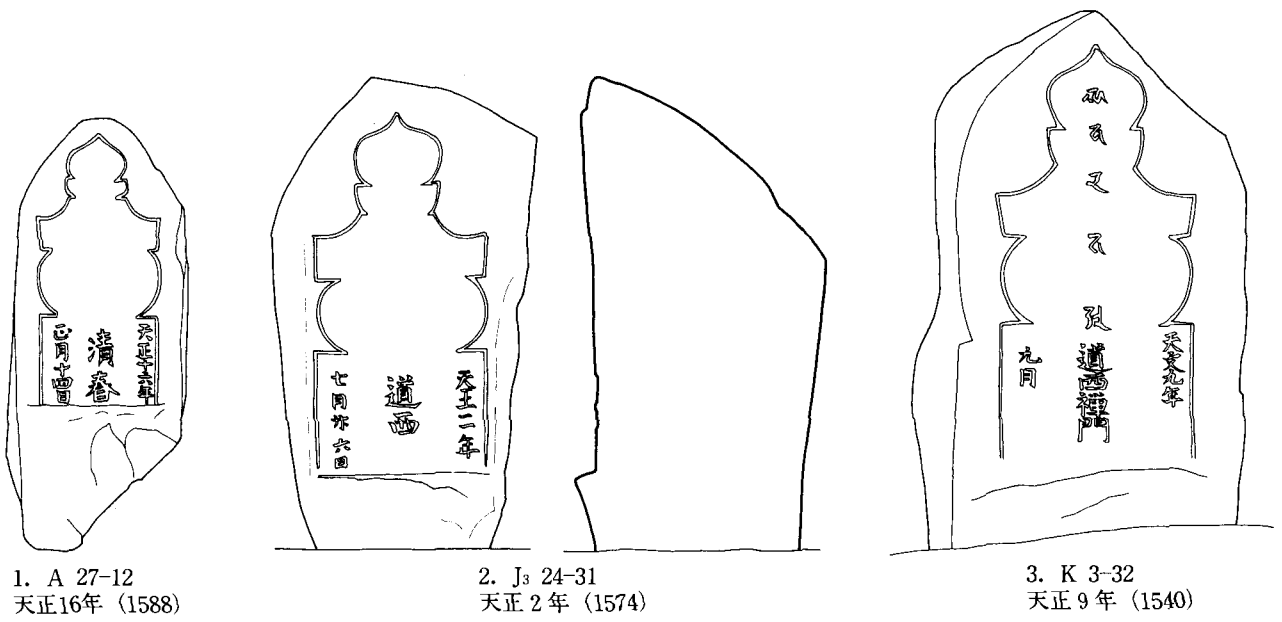
I a式：火輪の軒先があまり反り上がらず、水輪の重心が上方にある。縁をもたないものが多いが、もつものは縁と五輪塔の外形線が区別されている。紀年銘をもつものは16世紀代におさまる。紀年銘のないものや、古いため読めなくなっているものが多い [図4]。

I b式：1600～30年代。I c式：1600～70年代前半、特に寛永・正保年間(1624～48年)。I d式：1600～90年代、特に承応から寛文年間(1652～73年)。I e式：1590～1690年代、特に寛文・延宝年間(1661～81年)。I xa式：1622～35年。I xb式：1639～50年。I xc式：1645～59年。I xd式：1657～80年代。II a式：1660年代後半～90年代、特に天和・貞享年間(1681～88年)。II b式：1660年代後半～1700年代、特に元禄年間(1688～1704年)。III a式：1680年代。III b式：1690～1700年代前半。

まず、天文～永禄年間(1532～70年)に8基確認できる [図5]。a地区に5基と多く、i地区、b 1, 2地区に1基ずつで、中でも特に古い天文3年、同9年の石塔はいずれもa地区である。a地区、すなわち中山の地区に石塔が集中していることがわかる。ここには貞和5年の地藏石仏も安置されていたという話もあり興味深い。

文禄年間まで(～1596年)に紀年銘のある石塔が38基確認できる [図6]。また、I a式がこの時期までに収まるためこれに加えて、合計100基の分布をみる。前代みられたa地区、b 1地区、i地区に稠密な分布が認められるが、b 2地区の1基の周辺には広がらない。前者のように継続的に増加する場合は石塔が原位置からほぼ動いていないが、後者の場合は後世に移動してしまったためその周辺には石塔が広がらないと考えられる。この論理は石塔の移動の有無を考える際に非常に有効である。この時期に出現するe 1地区にもある程度のまとまりが確認できる。中山、成願寺、萱生の地区に集中して立てられ、次いで三味田の地区にみられるわけである。前三者は中山念仏寺墓地を取り囲むように位置する村であり、近くの村から墓地に石塔を立てるようになった。しかし三味田は最も遠い村のひとつであり、必ずしも距離の遠近のみで決まるわけではないことがわかる。

次に寛永年間まで(～1644年)の状況をみてみる [図7]。これにはI b, I xa式の年号不明石



0 $\frac{1}{10}$ 50cm

図4 背光五輪塔I a式

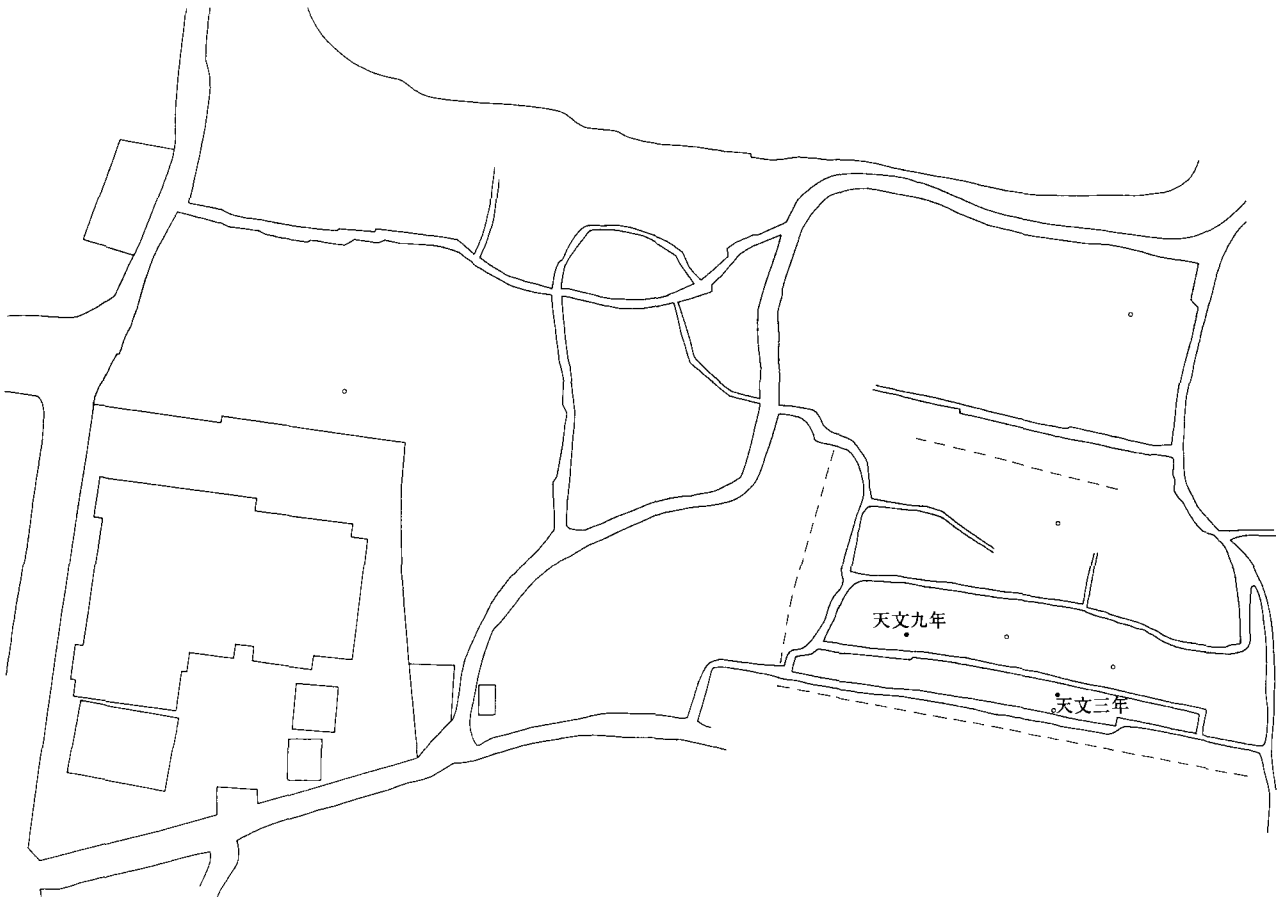


図5 天文～永禄年間の石塔分布

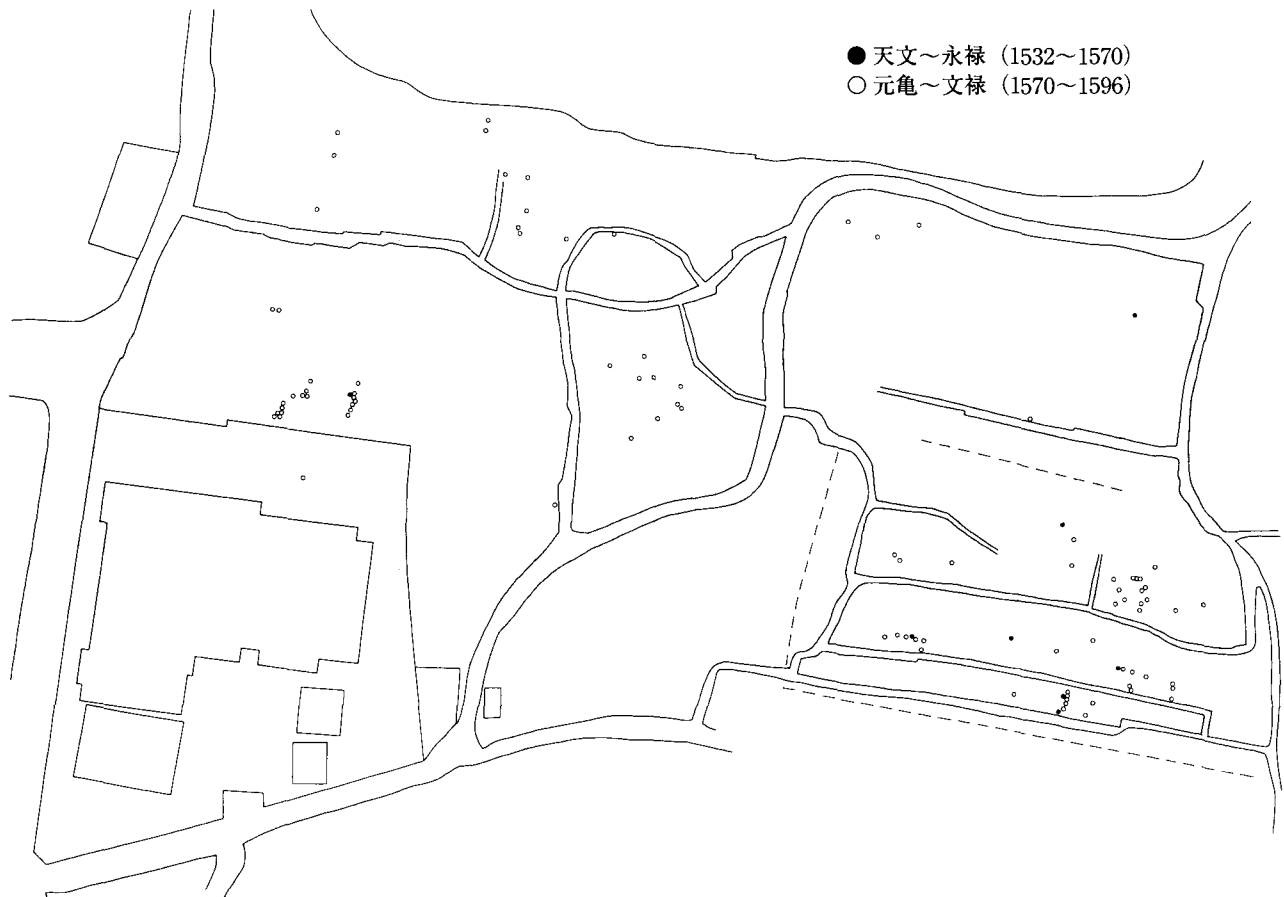


図6 天文～文禄年間の石塔分布



図7 天文～寛永年間の石塔分布

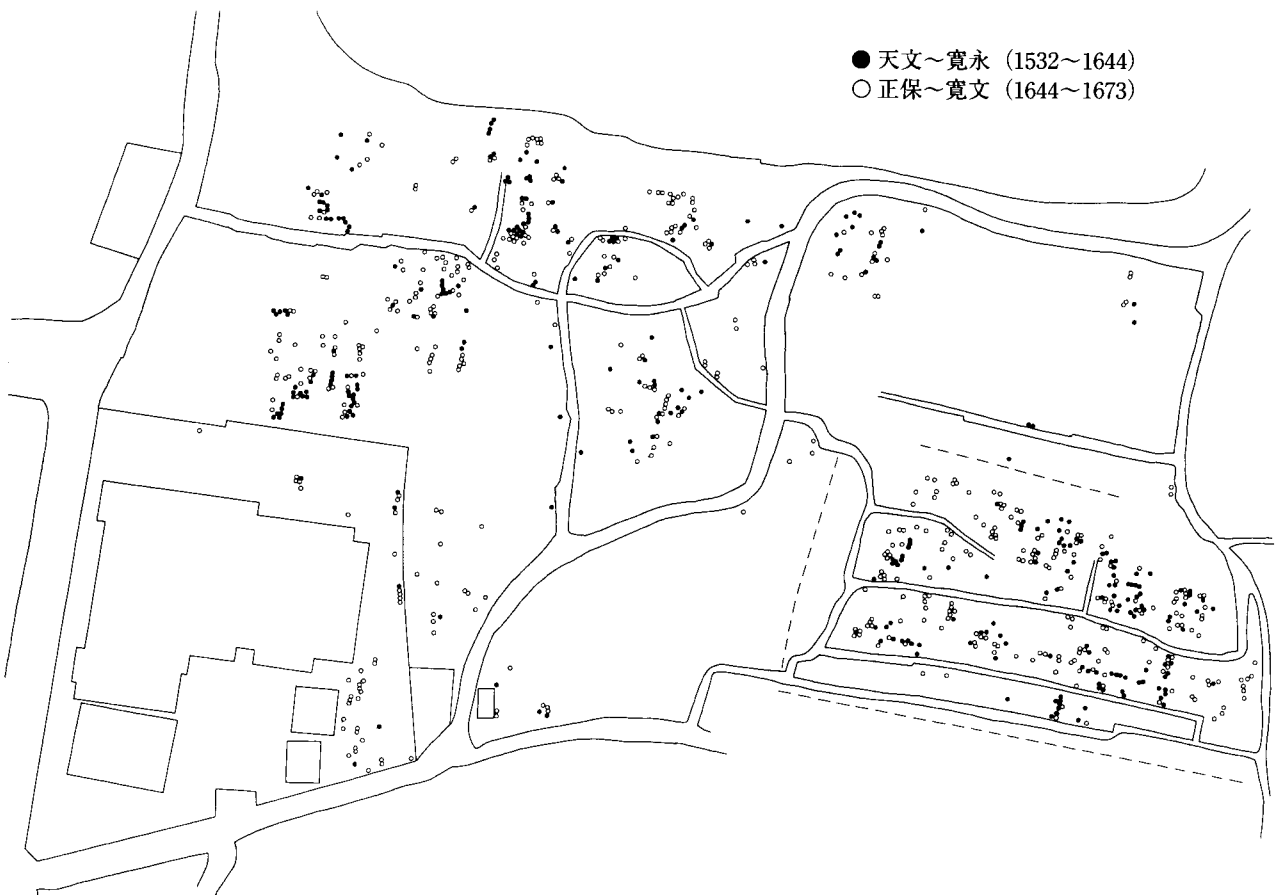


図8 天文～寛文年間の石塔分布



図9 天文～元禄年間の石塔分布

塔も加え、246基確認できる。a, b 1, i 地区はますます石塔が増え、e 1 地区も着実に増加している。g 1 地区は前代にもまばらな分布がみられたが、ここに来てかなりの密度に成長する。c 1, g 2, j 地区も g 1 地区ほどではないにせよ、点数が増えてくる。また、この時期になって新たに集中し始める場所に h 1 地区が挙げられる。すなわち、中山、成願寺、萱生、三味田の地区に加え、前代に少しみられた岸田、竹之内、長柄の地区、この時期からの新泉の地区に石塔が立てられている。

さらに寛文年間まで (~1673年) の分布状況を見る [図8]。この中には I c, I d, I x b, I x c 式の年号がわからない石塔も含め、615基になる。前代までに集中的な分布がみられた地区はますます増加している。また c 2, e 2, g 3, h 2, 3, 4 地区にも拡散したほか、d 区にも漸くまとまった数が立ち始める。しかし f 区はまだまばらである。この時期は、佐保庄の地区には石塔が立つようになるが、兵庫の地区にはまだあまりみられないというわけである。

そして元禄年間まで (~1704年) に、最初に図2でみたものに I e, I x d, II a, II b, III a, III b 式の年号不明石塔を加えた1,387基が確認できるようになる [図9]。この段階になって漸く f 地区、すなわち兵庫の地区にもまとまった数の石塔が立ち並ぶようになるのである。

③…………惣墓の形成過程

中山念仏寺墓地の石塔は、村ごとに時期差をもちながら立てられていったことがわかった。これは次の5段階に分けられる。

第1段階（天文～永禄）中山

第2段階（～文禄）成願寺，萱生，三味田

第3段階（～寛永）岸田，竹之内，新泉，長柄

第4段階（～寛文）佐保庄

第5段階（～元禄）兵庫

これにより，中山念仏寺墓地に10ヶ村の墓郷全てが石塔を立てるようになるのは元禄期まで待たねばならないことがわかる。そうするとこのことは，墓郷が段階的に成立し，元禄期になって漸く10ヶ村で構成するようになったことを表すのだろうか。

中山念仏寺墓地の墓郷は，^{おおやまと}大和神社の宮郷にほぼ対応するが，竹之内はそれに入っておらず，微妙に食い違いがある。野崎清孝氏が奈良盆地の惣墓を総体的に扱った中で，墓郷は山郷，水郷，宮郷といった自然環境による集団とは，異なった論理で形成されたものがあると説いている〔野崎1973〕。中山念仏寺墓地については宮郷と対応するためこれには当てはまらないとするが，宮郷とも微妙にずれるため，ここでも別の論理が働いていたと考えるべきであろう。野崎氏は異なった論理について，衆徒や国人といった領主層の影響と考えているが，既に指摘されているように，これが当てはまらない例は多い〔千田2001〕。要因は単純なものではなく，各々の墓郷によって異なることも予想されよう。近世になると奈良盆地は様々な中小領主層により村々が治められるようになる。中山念仏寺墓地の墓郷も，寛永16年（1639）段階では，中山・成願寺・佐保庄・三味田の一部が柳本藩領，新泉・兵庫・岸田が戒重藩領，三味田の一部が津藩領，萱生・長柄・竹之内が天領である〔幡鎌2001〕。近世の藩政村では説明のつかないこの集団の淵源を中世に遡らせることに無理はなからう。

一般に，庶民の墓である惣墓の成立は15～16世紀にかけてと言われている〔吉井1993〕。奈良盆地南西部の新庄町平岡極楽寺墓地の無縁石塔群の中に，「奉惣墓造立供養者ノア（梵字）逆修ノ永正十二年（1515）_亥二月朔正」と記された五輪塔地輪がある（第2部第2章）。この金石文資料からも，16世紀初頭に惣墓が成立していたことは確実である。吉井敏行氏は「農村における百姓層の経済的な向上，惣村制の確立，宗教的には念仏系仏教の民衆化，つまり遊行僧の活動，念仏講などの講集団の組織化といった複雑な歴史的條件」がそろうとその背景を説く。そして，庶民の火葬の需要が増えたため，この時期に本来遊行性のあった「葬送に従事し火葬を職とする特殊技術集団」である三味聖が墓地の周辺に定住するようになったとする〔吉井1996〕。中山念仏寺は寛永4年（1627）に再興した際，寺号を「念仏寺」に変えたとあり，それまでは「往生院」と呼ばれていた〔増上寺史料編纂所1979〕。天正8年（1580）に中山・成願寺・萱生で起こった水論に関する文書に「ワウシヤウキンノ六タウ」という言葉がみられ，この時期に往生院に三味聖（六道）が存在したことがわかる〔幡鎌2004〕。これらのことから中山念仏寺墓地が遅くとも16世紀後葉には惣墓として機能していたことが推定できよう。

墓郷の紐帯は中世的論理に基づき，その集団が形成する惣墓は金石文資料からは遅くとも16世紀初頭には成立していた。中山念仏寺墓地でも近世まで続く形式の石塔が16世紀前葉からみられ，後葉には三味聖が確認できることからほぼ同様と思われる。すなわち，近世に入ってから段階的に墓郷が形成されたとは考えられないのである。

ここで考慮せねばならないのが、埋葬地に必ずしも石塔を立てないという事象である。近畿地方を中心に、埋葬墓地（埋め墓）と石塔墓地（詣り墓）を分ける両墓制がある。これにはさまざまなタイプがあるが、埋め墓には木製の卒塔婆を立てる程度で恒久的な施設を造らず、これとは別の場所（村落内など）に石塔を立て墓参するというものである。中山念仏寺墓地は文献資料もほとんど残っておらず、またかつて両墓制がおこなわれていたとしても、すでにその記憶は残っていない。そこで、奈良盆地内の他の惣墓を参考にこの現象を理解してみたい。

奈良盆地北部の奈良市永井安楽寺墓地は11ヶ大字の墓郷からなる惣墓である。この11ヶ大字は全て永井安楽寺墓地を埋め墓とするが、ここに石塔を立てているのは2ヶ大字のみで、残りの大字は別に詣り墓をもっている。⁽²⁾奈良盆地北西部生駒郡平群町にある6ヶ大字からなる槻原墓地も埋め墓はここだが、石塔もここに立てる大字、他所に立てる大字、どちらにも立てる大字があり様々である。新谷尚紀氏はこういった事例を16ヶ所の惣墓で挙げ、大字によって様々な利用の仕方があることを論じている〔新谷1991〕。奈良盆地北部の大和郡山市伝宝墓については、政岡伸洋氏が詳細に論じている。それによると、以前は7ヶ大字が埋葬していたが、ここで火葬をおこなわなくなつてからは5ヶ大字に減った。大字ごとの墓地区画は明確でなく、3ヶ大字は伝宝墓に、2ヶ大字は村落内にある寺院に石塔を立てているという〔政岡1999〕。これらの例は、近年の惣墓利用の様々な形態を表しており、全般に両墓制が崩れていく経過を捉えていると言えよう。

中山念仏寺墓地を利用した墓郷10ヶ村内にも、石塔が多数残っている所がある。ひとつは長柄で、そこは現在埋め墓としても利用されている墓地である〔写真1〕。大正五年段階では墓郷から離脱しているが、墓郷に加わっていた段階でも法生寺三昧が長柄村墓所に通っているように、⁽³⁾他の村とは違い早くから村落内に埋め墓を備えていた。これに対し、兵庫、佐保庄、竹之内の3ヶ村は法生寺三昧が通うこともない村落内の寺の中に石塔を残している。兵庫神護寺には本堂脇を中心に355基の石塔がある〔写真2〕。特に本堂脇のものは“コ”字状を基本として18区画を構成しており、家ごとに墓域が分かれていたと推測される。ただし現在は雑草に覆われており使われていない。これらの石塔の主要形式は、背光五輪塔75基、舟形211基、櫛形37基、角柱形4基で、18世紀前半代が中心である。最古の年号は天正13年（1585）の背光連立五輪塔であるが、古手のものは少ない。佐保庄には50基分の石塔を集めた朝日廃寺がある〔写真3〕。⁽⁴⁾主要形式の内訳は背光五輪



写真1 長柄墓地



写真2 兵庫神護寺墓地



写真3 佐保庄朝日廃寺墓地



写真4 竹之内宝伝寺墓地

塔12基、舟形10基、楕形2基、角柱形2基であるが、背光五輪塔も新しい形式が多く、やはり18世紀前半代が中心である。最古の年号は天文23年(1554)の地藏石仏である。竹之内宝伝寺には、本堂正面に集められた無縁石塔群と、庫裏裏手に乱立する石塔群があり、合計159基確認できるが[写真4]、ここも現在は使われていない。主要形式は背光五輪塔54基、舟形62基、楕形10基、角柱形2基で、17世紀後半から18世紀前半が中心である。最古の年号は文禄2年(1593)の不定形名号碑である。これらはいずれも寺の境内に石塔を立てていたことを物語る資料である。そして、近世半ばをピークに次第に石塔を立てなくなったことがわかる。

以上のことを総合すると、中山、成願寺、萱生、三味田、岸田、新泉は惣墓にのみ石塔を立て、竹之内、長柄、兵庫、佐保庄は惣墓と村落内に石塔を立てていたことになる。竹之内の場合は中山念仏寺墓地から最も遠い場所にあることも考慮する必要があるだろう。しかし、兵庫、佐保庄については惣墓に石塔を立て始めるのが非常に遅いことから、当初は村落内のみで石塔を立てていたと想定できよう。中山念仏寺墓地に石塔が立てられていない16世紀や17世紀前半の石塔は、村落内の墓地にもあまりみられない。惣墓と違い村落内の墓地は非常に狭いことから、古手の石塔が処分されていった可能性が考えられよう。実際、佐保庄朝日廃寺の付近の川底からは石仏が掘り上げられることがあるという[幡鎌2001]。

墓郷は惣墓を共同利用する村落集団である。そのため、惣墓に石塔は立てずとも埋葬は惣墓におこなっていたと解釈しなければ、墓郷としての意味をもたない。16世紀前半、惣墓形成の初期段階は、誰もが石塔を立てられたわけではないため、惣墓に埋葬するだけのケースも多かったであろう。しかし16世紀末にある程度の石塔数が確認できるようになった時、村によって石塔の有無に差がみられるのは、平均的な村落の墓地である以上、村落間の経済格差とは言えまい。全く石塔を立てない無石塔墓制であった可能性もあるが、兵庫神護寺に天正13年の背光連立五輪塔が残っていることなどからも、石塔は村落内に立てていたと考えられよう。そして、17世紀代を通じて村単位で墓制が転換していき、中山念仏寺墓地に段階的に石塔が立てられるようになったのである。18世紀前半代はまだ兵庫や佐保庄では村落内に石塔を立てる家もあったが、次第に全ての家が中山念仏寺墓地に石塔を立てるようになり、現在の墓地景観が形成されたのである。

「大正五年墓地実測図」を活用し、大字ごとの石塔造立傾向から墓制にまで言及した。特に墓制に関しては、これまで民俗学の立場で論じられることが多かったが、その学問的性格上、中近世にまで論究するには限界があったと思われる。多くの視点から論じるべき議論であるため、不勉強な筆者では力不足の点が多い。ただ、これまで考古学の立場でおこなってきた石塔調査は、その労力の割には他分野に比べ声が小さかったように思われる。本稿で執った手法が有効かどうかはさて置き、今後の研究に一石を投げられれば幸いである。

末筆ながら、本稿は辛抱強く共に石塔調査を進めてきた調査メンバーの力がなければなせなかったものである。ご苦勞に深く敬意を表したい。ありがとうございました。

●註

- (1)——貞和5年の石仏と永享7年の五輪塔は移動していることが確実であるため除く。また墓地北西に集められた無縁石塔群(X区)や念仏寺東南角に積上げられた「無縁塚」(Y区)、念仏寺の門前の石塔も移動しているため除外する
- (2)——坂本亮太氏によると、8ヶ大字となっている[坂本2002]。新谷氏が調査をおこなった1981~83年から20年近くたつ間に変化したものと思われる。
- (3)——「大和国三昧明細帳」に「長柄村墓所 此坪数式百拾坪 是通イニ也」と記されている。
- (4)——入口左手に「不許酒肉五辛入門内/元禄十一年十二月吉日 朝目寺」の石柱が立っており、「朝目寺」であった可能性もある。

●参考文献

- 伊藤唯真 1979 「新出の『三昧聖出緒書』『大和国三昧明細帳』について」『鷹陵史学』6
- 坂本亮太 2002 「惣墓からみる中世村落」『ヒストリア』182
- 新谷尚紀 1991 「石塔立地の多様性と両墓制成立の前提」『両墓制と他界観』吉川弘文館
- 千田嘉博 2001 「惣墓理解のための基礎的前提」『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』国立歴史民俗博物館
- 増上寺史料編集所 1979 『増上寺資料集』5 統群書類従完成会
- 野崎清孝 1973 「奈良盆地における歴史的地域に関する一問題」『人文地理』25-1
- 幡鎌一弘 2001 「中山念仏寺墓地の墓郷と歴史的環境」『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』国立歴史民俗博物館
- 幡鎌一弘 2004 「中近世移行期における寺院と墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』112
- 政岡伸洋 1999 「奈良盆地における墓郷と墓制」『鷹陵史学』25
- 村木二郎 2004 「石塔の多様化と消長」『国立歴史民俗博物館研究報告』112
- 吉井敏幸 1993 「中世群集墓遺跡からみた惣墓の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』49
- 吉井敏幸 1996 「三昧聖と墓制の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』68

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(2003年3月28日受理、2003年6月25日審査終了)